

「こんにちは」から始まる国際交流

KIFA かにえ国際交流友の会
Kanie International Friendship Association

会報 No.4 (April 1997)



インターネットの時代だからこそ

会長 棚橋 美知子

昨年3月の終わりから4月の始めにかけて、KIFAとしてはじめてホームステイをてがけましたが、その最初のゲスト、ドイツハンブルグの一行は、まず彼らの町の本、国旗、市の旗をプレゼントしてくれました。私たちはまだ自分たちを紹介し、手渡せるものが何もなく、大変慌て、考えさせられました。

また、今年3年目を迎える「日本語しゃべろう会」であったことなのですが、「なぜスリユビというのですか?」とか「信号の色は緑なのに、なぜ青というのですか?」こういう素朴な疑問に私はすぐに答えることができませんでした。外国人は私たちでは考えもつかない質問をぶつけてきます。日常的なものから、この町のこと、伝統文化まで。私たちにとって、外国のことを色々知るとはとても楽しいですが、まずは日本のことをもっと知る必要を痛感させられます。インターネットの時代だからこそ、自分の足元を固めておかなければと思います。

KIFAは会員の皆さまに支えられ、おかげさまで今年5年目を迎えます。節目の年を記念して特別事業も予定しています。今年も多くの方々にご参加ご支援を賜りますよう、心よりお願い致します。



期待が高まる国際交流の輪

蟹江町長 佐藤 篤松

かにえ国際交流友の会が創立5周年を迎えられましたこと、心からお慶び申し上げます。

この4年間、各種イベントを通しての国際交流事業の推進、「日本語しゃべろう会」「語学ボランティア」を始めとするボランティア活動での活躍は素晴らしいものがあり、感謝と敬意を表します。

昨年は、ドイツからのホームステイ希望者の受け入れを行い、意欲的に活動の幅を広げられ、蟹江町における国際交流の輪はますます大きくなっていると確信しております。

また、蟹江町は「活気に満ちた個性あるまちづくり」を基本理念に、外国人を含む全てのかたにとって「住みたくなるまちづくり」を目指しています。そんな中で、かにえ国際交流友の会の活動は、今や身近な隣人となった外国人のかたがたと町民とのコミュニケーションの手助けをしていただき、共により快適に生活していけるまちづくりの一役を担っていただいています。

最後になりましたが、今後とも国際交流活動に積極的に取り組まれていかれることを切に期待し、役員のかたがたのご苦勞に敬意を表するとともに、かにえ国際交流友の会のみならずのご発展と会員のみなさまのご健勝を心からお祈り申しあげ、ご挨拶といたします。

かにえ国際交流友の会 (K I F A) 発足5周年!

当会は今年で創立5周年となります(公式には1993年4月に発足しましたが実際にはその前年から活動していました)。この記念行事の一つとして11月8日(日)に、国際交流寺院コンサートを法応寺で開きます。この時に演奏していただく、涂善祥さんとデュエット・エスペランサの日下部由美さんに紹介記事を書いています。いただきました。

「国境を越えた中国琵琶の国際交流」

中国琵琶演奏家 涂 善 祥

この度は、かにえ国際交流友の会五周年の記念行事に中国琵琶の演奏でお招き頂き、とても喜んでお引き受け致しました。

私は日本へ来てはや九年目になります。二年前に東京芸大大学院の修士課程を修了し、今は日本各地で演奏活動をしております。沢山の友人もできました。初めて中国琵琶に接する日本人の皆様は、中国の琵琶と言うものは、暗くさびしい音色の楽器と言う先入観をもっていらっしゃる様ですが、私の演奏を聴いてからは、完全にイメージが変わったと言われます。それは、時代の変遷によって多くの改良が加えられたことが大きな要因です。撥の変わりに義爪を付けた五本の指によって演奏し音域も拡大され、音色は弦の材料が絹、羊腸から金属弦にかわったことで明瞭になりました。日本の琵琶では奈良時代頃に、中国から伝来し、宮廷雅楽で使用される楽琵琶をはじめ、平家琵琶、薩摩琵琶など時代によって国琵琶の伝統曲目のほかに、日本の邦楽とアレンジしたり、西洋楽器とアンサンブルしたり又、オーケストラとのコンチェルトなど中国琵琶のあたらしい可能性を追求しています。近年では初めての中国人音楽家として韓国のソウルで公演したり、フランスのパリなどでも公演、又、日本人の様々なジャンルの音楽家を中国へ招待し中国公演を実現させたりと一本の中国琵琶を通じて、国際的交流に少しでも役に立てることを願って活動を続けてゆきたいと思っています。



「アルパをご存じですか」

「デュエット・エスペランサ」

日下部 由美 ガブリエル・ゴンザレス

「アルパ」という名の楽器をご存じでしょうか?。「アルパ」とはスペイン語でハーブのことですが、ここで言う「アルパ」とはクラシックハーブのことではなく中南米の民族楽器、インディアン・ハーブのことです。普通のハーブより小さめで半音操作(ピアノで言う黒鍵)が無いのが特徴のシンプルな楽器です。日本ではまだ珍しい楽器ですが、中南米諸国、特にメキシコ、ベネズエラ、パラグアイ、ペルーなどで盛んに使われています。

私共のグループ「デュエット・エスペランサ」はパラグアイ製のハーブを使ってパラグアイの民族音楽は

もちろんメキシコ、ベネズエラ、ペルー、アルゼンチン等、南米各国のすばらしい音楽を演奏しながら活動しています。南アメリカの楽器と一口に言ってもその種類は本当に数多く、いわゆる各地のフォルクローレと呼ばれるものからラテン音楽まで様々で一つのコンサートで全部ご紹介できるものではないのですが、そのほんの一握りの音楽に皆さんが触れていただくことによって、南米の音楽に興味を持ってもらえたら私達も演奏家としてこんなにありがたいことはありません。「デュエット・エスベランサ」はバラグアイで結成され1994年から日本で活動しています。イベント・ライブ・コンサート活動が中心ですが東京近辺で「アルパ教室」を開いて楽器の普及にも力を入れています。遠くからは大阪、北海道からも習いに来る人がいる程魅力的で、それほど弾きこなすのは難しい楽器です。(何しろ半音操作(シャープ・フラット)がないのですから)この楽器「アルパ」を日本中に普及させるのが私たちの願いです。名古屋での演奏は始めてなので私達もとても楽しみにしています。

11月に皆さんとお会いできるのを楽しみにしています。どうぞコンサートに足を運んでいただけますようにと心から願っています。



ハンブルグからのホームステイ訪問団

「Guten Tag!」

田口 常代

我が家は主人の照明、息子健太郎(中2)、娘愛佳(小6)そして私です。昨年春休み2週間(3/26-4/8)、ハンブルグからのパウル・ゾンネンベルガーさん(58)、ギゼーラ・ゾンネンベルガーさん(56)御夫妻のホームステイを受け入れました。

最初の対面の日、町のバスから降りてくる一行を前にしながら「Guten Tag!」と挨拶ができないのは情けなかったのですが、対面式の会議室の入り口でやっとみなさんに言えました。

その後、子供達を含めて家族全員でお互いに交流を深めることができましたが、その中で子供2人に対してそれぞれ一人前の人間として扱い、接してくれたことは感心したことの一つでした。とにかく忙しい今回の彼らのスケジュールでしたが、生き方、教育論など本当にたくさん話ができることは幸せでした。

二人がとっても仲が良いのも素敵でした。子供が巣立った後もあのように仲良く若々しい夫婦でいられたらと思いました。 Danke schoen!



「ドイツからベッカーさんを迎えて」

菅原 良子

今回はじめてドイツの方をホームステイで受けることにしたのは、すでに会員である平林さんの紹介でした。申し込み日の会合には、先に予定が入り出席できず、お受けできないものと思っていましたので、決まると聞きうれしく思いました。

実は私の家族、主人と子供（4歳男、2歳女）と義母はヒッポファミリークラブの会員ですが、ベッカーさんと、外国の方が通算して10人我が家に来たことになります。

英語が苦手ということで、ドイツの方ならと受けたのですが、実際のコミュニケーションは英語だったので、英語も正面から取り組もうと感じさせてくれたホームステイでした。

おかげで、オーストラリアの25歳の女性エンアちゃんを一ヶ月ホームステイで受けエンジョイしている今日この頃です。貴重な機会を与えて下さってありがとうございました。

「百聞は一見にしかず」

イルゼ・ヨナート

最初、地球の反対側では、人々はどんな暮らしをしているのだろうかと言った、単なる知的好奇心しかありませんでした。しかし、仕事で、極東（我々の住むヨーロッパを世界の中心と考えると太平洋に面したアジア諸国をこう呼んでいます。）に目を向けるようになったとき、私は問い続けました。日本人はどんなふうにならぶのだろうか？ 言葉をどう組み立てるのだろうか？ 日本の絵は？ 日本の宗教的建築は、又はそうでない建物は？ 日本の風景は？ 日本の気候は？ 日本の植物は？ 疑問を解いていけばいくほど、また新たな疑問が生まれ、そのうちにいつしか日本に関する知識が深まり、日本人とはどんなものかという知識がはっきりしてくるのです。

日本語のイケバナ、ボンサイ、オリガミ、カラオケ、マージャンはドイツ語に訳されずそのまま入ってきています。だれもが、まったく日本に関心のない人でさえ、ここ2～30年の日本の産業や輸出の急速な発展を見過ごすことはできませんでした。ドイツのほとんどどこにもカメラ、ラジカセ、車、バイクなどの日本製品がはいつてきているのですから。このような訳で、ドイツの人々は日本にとっても魅力を感じています。



ある時、私はすばらしい諺に出会いました。それは「百聞は一見にしかず」という言葉です。昨年3月、日本を訪問する機会を得た時、私が実際に見た、すばらしい建築物、数々の高度に発達した古代文化の遺物、日本人の親切、そしてそよ風に柔らかな音をたてていた竹林など、どれも私を熱中させました。

ここで、ドイツの諺も紹介したいと思います。「Einmal ist keinmal」（一度は数のうちに入らない）わたしは、数学的な物の考え方を好みませんが、この諺の通りにあなたがたの愛すべき国を一度だけでなく、さらに日本人の暮らしを色々な角度から見ていきたいと思っています。

人間はおもしろいもので、毎日楽しんでいることにはあまり評価をしないのですが、遠くにあるものにはとても関心を持つものようです。つまり、旅行をすることによって、海外で得た印象と比較して自分の国の新しい面、いい面を発見するものなのです。旅行とは“日頃心にたまったほこりのすす払い”ではないでしょうか。

では、ちょっと3つ目の諺をご紹介だけしておきたいと思います。「Aller guten Dinge sind 3」（3という数字は縁起がいい。）誰も先のことはわかりませんが・・・。

注）原文は英語。ヨナートさんはハンブルグからの訪問団の一人です。今年のホームステイプログラムにも参加されます。

企業会員（ご協力ありがとうございました。）

(株) ニッシンテクノス	(株) 日光鋳工場	(株) 八形工業
(株) 蟹江住宅設備	(株) アイエス	

日本語教室受講者

「私の日本の印象」

坂口 マージー (フィリピン出身)

私はフィリピンから来た坂口マージーといます。日本に来てもう5年になります。日常生活は普通の主婦と変わらない生活です。ただ現在は主人の父親と共に生活していますが、日本のおじいさんは、頑固なので時々喧嘩になりますが、がんばっています。日本の生活で一番困るのは、病気をして病院に行くとき日本語がまだ分からなくて困るときがありますが、国際交流の方に助けていただいています。でも本当に日本語は難しいです。

今は、日本の生活にもほとんど慣れ、食べ物では刺身、納豆でも食べられます。とくに日本の寿司は本当においしいです。時々フィリピンの友達とフィリピン料理を作って食べていますが、主人はあまり食べてくれません。

又、時間があるときは、同じグリーンハイツの日本の友達とカラオケに行き楽しんでます。今は日本の歌もだいぶ覚えました。私の得意な歌は、山口百恵の「いい日旅立ち」です。

しかし、日本の冬には何年たっても慣れません。本当に日本の冬は寒くていやですが、雪を初めて見たときは、真っ白できれいなので感激しました。

まだまだ周りの皆様にお世話をかけることが多いと思いますが、これからも宜しく願っています。



「家族へのメッセージ」

露崎 マリベット (フィリピン出身)

わたしはつゆさきマリベットといます。ことしの八月一日に35才になります。しゅじんと、けっこんして、もう10年になりました。こどもが二人いて、うえがおとこの子で6才、ことしの四月からしょうがっこう1年せいです。したはおんなの子で2才、まだあそんでばかりです。

はじめてきたとき、にほんはすばらしくにだとおもいました。ことばはむずかしかったけど、なんとなく、すこしずつおぼえました。にほんのくらしもだいぶんなれました。にほんじんとけっこんしてることは、うれしいことばかりじゃなくて、かなしいこともあります。しゅじんはきがみじかいので、すぐおこるときもあります。しごとで、いろいろのmondaiをかんがえるから。でもこどもたちにはすごくあまいです。やっぱりこどもがいることは、ほんとうにたいせつです。ふうふげんかがあっても、こどもにきずかれなないようにすくなかなおります。こどもにとっては、パパとママがなかがよいのが、しあわせなぞくなのです。しゅじんだけでなく、しんせきの人たちのおかげで、こういうしあわせなくらしができます。みんなにだいじにしてもらって、こどもたちもかわいがってもらって、ほんとにかんしゃしています。

フィリピンのおかあさんがにほんにあそびにきたとき、しんせきのおねえさんたちによくしてもらってほんとにうれしかったです。いっしゅうかんのみじかいあいだでしたがフィリピンのおかあさんに、しゅじんのおねえさんたちはあたたかくようこそいらいしゃいましたと、いってくれました。あっちこっちにつれてってもらったり、にほんのたべものをつくってたべさせてもらってほんとにうれしかったです。おかあさんにはほんのたべものはおいしい、と行ってたべましたが、さしみだけはたべませんでした。にほんじんのあい

賛助会員 (ご協力ありがとうございました。)

もへの寿司	(株) 八幡製鉄所	(株) 若菜	松岡豊泉閣
(株) フミン加工	蟹江広寿司	(株) 東海興業	(有) みづほ園芸

さつはあたまをさげます。おかあさんもおなじことをやっていた。にほんのおんせんもすきで、ゆきはきれいだけど、やっぱりにほんのさむさは、おかあさんにとってつらいものでした。おかあさんははながだいすきだから、もしさくらがさいていたら、もっともつよこんだとおもいます。おかげさまでいいおもいでができましたので、ほんとにしゅじんと、しんせきの人たちには、ありがたいとおもっています。

いまこどもがどんどんおおくなるので、わたしがおしえることができないと、ほんとにはずかしいことなんです。KIFAのおかげで、にほんごのしゃべりかたとか、よみかたとか、ぶんぼうもすこしずつおぼえました。KIFAの人たちにもやさしくしてもらって、にほんのこともいろいろおしえてもらって、ありがたいとおもっています。わたしのじんせいはみずのながれとおなじで、しゅじんと2人のこともといっしょに、へいわなくらしをがんばってつづけていきたいとおもいます。



「私と家族のこと」

バルボザ・セバスチアオン・ドミンゴス

私はブラジル人で非日系人ですが、幼い頃から日本のことが知りたいて思っていました。1983年に日系二世である妻と知り合い、3年付き合った後、1986年に結婚しました。

1991年に仕事の為に日本に来る事を決めた時には、バルバラ（長女3歳）とホドリゴ（長男1歳6ヵ月）の二人の子供がいました。

日本には2年位の滞在の予定でしたが、来日後2ヵ月に妻（エリザ）が妊娠した為、私達の問題のはばが変わって来ました。3人目（アルベルト）が生まれ、私たちの経済的設計は別方向へ進む事になり、帰国が長引く事になりました。その為、子供達は日本語しか話せなくなり、私達には大きな問題となりました。

幸運でしょうか、友人から蟹江役場で外国人に日本語を教えていると聞き、役場まで行きました。



KIFAは気持ち良く私を受け入れてくれました。これで私も子供達や周囲の日本人達と分かり会えると思ひ、できるかぎり日本語教室に出席するようにしています。

でも私達の問題はこれで終わったわけではありません。ブラジルではまだ他の国から来た子供達に対応出来るような学校はないので帰国後にまた同じような問題が続く事でしょう。

日本には自然災害がありますが懐かしいブラジルへ帰る事を考える都度、この素晴らしい国と離れなくてはならないと思うと辛くなります。

賛助会員（ご協力ありがとうございました。）

(株) 松はま	(有) たちばなや	(株) 片桐銘木工業	(有) 共同建設
観音寺	高坂英次	月星光博	山本美代子

さよなら講演会

「どこが違うアメリカ人と日本人」

バイロン・ウォルト（アメリカ出身）

日本にきてそろそろ5年半になります。日本に来る前は一年位のつもりで来ました。日本に住んでみて日本やアメリカに対しての考え方が変わってきました。よそへ住んでみると、その国のことがよくわかるばかりでなく、自分の国のことが以前よりよりわかるのです。これは私ができる限り外国にすんでみることをお勧めする理由です。たぶん日本の知らなかった一面を発見できると思います。

まず最初に断っておきますが、いまからお話することは、私の意見です。私の奥さんのローリーでも私の意見に全部賛成ではありません。日本にいる外国人の数だけ違った考え方や感じ方があるのです。



蟹江に来る前は豊橋にいました。豊橋ではたくさん祭りを見たり、参加したりしました。おみこしをかついだり、乗せてもらったりもしました。手筒花火をやらせてもらった時は感激でした。日本人はまじめで堅いイメージがありますが、祭りの日は朝からお酒を飲み普段からは想像できない一面を見せてくれます。世界中の人が日本の祭りを見たら、きっと日本人に対する認識を変えることでしょう。祭りの中でも、特に国府宮のはだか祭りと、田縣神社の豊作祈願の祭りが好きです。はだか祭りのビデオは国に帰って友達や家族に一刻も早く見せたくてうずうずしています。アメリカ人には想像もできない日本人の様子が写っているからです。

日本では構わないけれどアメリカではいけないことがたくさんあります。風邪をひいた時、日本では人前で鼻をかまずにすすりますが、アメリカでは音を立てて鼻をかみます。アメリカではトイレを使っていない時はドアは開けたままにしておくとか、仕事場や車の中でひげを剃らないなど、たくさん違いがあります。同じことで驚いたのは、学校で先生方が職員室で爪を切っていたことです。もうひとつ付け加えると各クラスに爪切りが二個ずつ置いてあったことです。学校の先生といえば、日本では先生方が生徒の家庭のことも面倒を見ていることです。アメリカでは家庭のことは親の責任です。

次に、私と日本人でははっきり違った対応をした時の話をご紹介します。私は絶対この話は忘れられません。“我慢”は日本人にとって大切なことです。もちろんアメリカ人でも同じですが、日本人の場合何もしないでただ“我慢”しますが、アメリカ人は何もしないで“我慢”することはしません。私の家の近くの公園にいたニワトリのことです。このニワトリはいつも子供たちに追い回されていて、かわいそうに思っていました。ところがある朝、その気持ちは無くなってしまいました。というのも朝の4時に大声でコケッコと鳴いたのです。すっかり目が覚めてしまった私はその後眠れませんでした。それが2、3日続いたので同僚の先生に相談をしました。彼らは飼っている人に言うべきだと、言いました。その後も同じことが続いたので、蟹江北中の先生や生徒に、このニワトリのことについて、何か知っていることがあるかどうかをたずねました。ある生徒が、それは私の隣の人が飼っているニワトリだと教えてくれました。そこで私は、いつかそのニワトリを捕まえて、焼き鳥にして食べようと思っていると話しました。そうすれば、生徒たちも可愛がっているニワトリだから、どこか他の場所へ連れてってくれると思ったからです。ところが計画は失敗に終わりました。とうとう頭にきた私は、ある朝石をぶつけてやりました。でもベットの戻ってしばらくすると又、大声で鳴くのです。もうどうして良いかわかりません。ローリーはいらいらしている私を見かねて、日本人の友人に電話をしてくれました。そして役場に話をしてもらい、そのニワトリを連れていってもらいました。後で知ったのですが、そのニワトリは隣の人のものではなく、みんなも困っていたとのことでした。近所の人にはじっと我慢するしかなかったようです。私がいなかったら今でも、このニワトリは毎朝鳴いていることでしょう。

私たちは、もうすぐ帰国するので、日本式のお風呂に入れなくなるのが残念です。日本では親子でお風呂に入る習慣があることはすばらしいことです。アメリカに帰ったら日本式お風呂を作るつもりです。

最後になりましたが、蟹江ではたくさんの皆様に助けていただきました。一人一人に会ってお礼を言えないのが残念です。皆様の親切がなかったら、もっと早くに帰国していたと思います。言いたい事はたくさんありますが、このへんで終りにします。ありがとうございました。

注) 原文は英語で、2月16日に行われた講演会の内容から抜粋したものです。



海外旅行記

「モンブラン登頂記」

川村 信之

来年の山岳部創立四十五周年を記念して、どこか海外登山でも計画しようじゃないかとの話がでて、ヨーロッパアルプスの最高峰・モンブラン(4807m)に挑戦してみようと決まったのは昨年(平成7年)の12月だった。

早速、ルートや行程の文献調査を行ったところ、モンブラン登山の難問は二つある事がわかった。

一つは3800mという、富士山の頂上より高い山小屋に宿泊し、その後4800mを越す高所まで行ってくることによる高山病対策である。二つ目は登頂して下山するまでの行程が、約10時間という超長時間行動となることである。これらへの対応策としては、いずれにしろ事前の十分な訓練が必要であり我々は約半年くらいかけて、入念に準備を行ってきた。

高度順応のためには、富士山(3776m)に登って一泊したり、数千mに相当する減圧室に入ってトレーニングを積んだりした。また、ハードな行程への対応のためには、3000mを越す槍ヶ岳や穂高岳を上高地から十数時間かけて往復したりして、万全の準備を整えた。

そしていよいよ平成8年8月17日から10日間の予定で、会社の山岳部員9名で名古屋空港からモンブラン登山に出発した。

モンブラン登山の基地は標高約1000mのところにあるシャモニーで、ここからバス・ケーブル・登山電車と乗り継いで、登山が始まる標高約2400mのニーデーグルに到着。



ここから登山を開始し、登頂のためのベース基地となるグーテ小屋(標高約3800m)までは約5時間の道のり。途中にあるテートルース小屋(標高約3200m)からは雪山の世界で、特に落石が頻発・集中するクーロアールの通過と、標高差600mくらいの傾斜のきつい岩場の急登が、なかなかの難問だった。

グーテ小山まで登った日は天候が良かったが、翌日は吹雪で山小屋に足止め、三日目も吹雪や雷で行動不能となり、いよいよ四日目はこの日中にシャモニーに戻らないと帰りのフライトに間に合わないラストチャンスの日を迎えることとなった。

この日、早朝1時半に起床して山小屋の窓

を開けた途端、まさか夢のような満天の星空が眼前に広がっているのではないか。早速2時40分頃ヘッドランプをつけて小屋を出発し、アイゼンのよくきく雪原やナイフリッジを通過し、5時間後の7時40分頃、夢にまで見たモンブランの頂上に立った。

帰路グーテ小屋についた正午頃には山頂付近は再び雲に覆われ始めており、本当にごくわずかな一瞬の晴れ間をついた、奇跡的な登頂成功であった。それにしても、若干の高山病の症状に悩まされながらも無事登頂成功できたのは、事前の周到な準備があつてこそと自負している。

「あこがれのスイスアルプスを訪ねて」

服部 小夜子

長年の夢「スイスアルプス周遊の旅」がようやく実現し、今年の7月モンブラン(4807m)、マッターホルン(4478m)、ユングフラウ(4150m)の山々に逢ってきました。7月のスイスは家々の窓辺に、街角に、高原に、花があふれんばかりに咲き乱れ、澄みきった空気はおいしく、それはすばらしい季節です。全行程天候に恵まれたのも幸いでした。

モンブラン観光は、シャモニーよりロープウェイにて一気にエギュデミディ展望台(3842m)に登り、そこからの展望です。空気が薄く、高山病予防のため静かにしているのです。でもこの限りなく青い空、純白の山々をしっかりと目に焼き付けました。モンブランはやさしい山でした。

マッターホルン観光のためツェルマットに泊まりました。その小さな古いホテルが気に入りました。古い家具はきれいに磨かれ、なんとエレベーターは手動です。気分は白黒映画の主人公! 部屋は下が居間で上が寝室、屋根裏部屋になっていて、天窓より満天の星を眺めながら眠りにつきました。ツェルマットの町は一般の自動車が締め出され、乗り物は電気自動車と馬車で移動するのです。この町では、すがすがしいアルプスの空気と静けさを、マッターホルンの景観と同じくらい大切にしているのを感じました。マッターホルン観光のため高山植物のお花畑を縫うように登山電車でゴルナーグラード展望台(3100m)へ……。ウー見えました憧れのマッターホルンが!! 4000m級の山々が連なる中、一際くっきりとその勇姿はそびえたっています。まさに、ぐるり360度大パノラマです。胸が熱くなりました。

マッターホルンに別れを告げ、氷河特急にてユングフラウヨッホ観光のためグリンデルワルドへ向かいます。牛がカウベルをひびかせ無心に草を食み、その中で観光客には目もくれず一生懸命冬の飼葉の草刈りをしている青年が印象的でした。登山電車でユングフラウへの途中アイガーの腹中で下車し、アイガー北壁に開けられたのぞき窓より眺めた大氷河には圧倒しました。高山病にかかり始めた主人には、展望台にて休んでいてもらい、私はもう少し高い所までゆっくり登りました。アレッチ大氷河が眼下に見えます。すばらしい眺めです。もう二度と来られないと思うと不思議に力が湧いてきて、その満足感に腰痛が負けました。私にとっては宝玉の旅でした。



雄大なり大パノラマとはこのことぞマッターホルンは吾にせまり来
グリンデルワルドをこよなく愛せしその丘に新田次郎の碑しずかにねむれり
カウベルと牛の鳴き声チャベルの鐘と大シンフォニーなりスイスのひととき
家々に核シェルターを持つと云うその上にありスイスの平和は

「南イタリア -私の印象-」

中西 淳子

ローマの北、オルビエート。ここにはすばらしいドームがある。ファサードには聖書のシーンがいくつも描かれ、金色にキラキラと神聖な輝きを放っていた。これがこの旅の始まりだった。イタリアは歴史のある国。どこにいても博物館の中を歩いているような街並が迎えてくれる。ここでは一ヶ月の旅の中で印象に残った町について少しだけ書いてみたいと思う。

日本人に人気なのは北の町、フィレンツェ、ミラノ、ヴェネツィアなどだが、私は南の町が好きである。有名な所ではナポリ。貧しい、危険な街のイメージが強かったナポリだが、日がたつにつれ街に対するイメージが変わっていく。「ナポリを見てから死ね」という言葉があるがまさにそのとおり。碧い海、パステルカラーの街並という外見の美しさはもちろんだが、素朴な味の料理、生活の臭いのする裏通りなど気取らない部分にも親しみを感じてしまう。ヨーロッパの街では景観保護のため洗濯物を表に干すのを禁止している所が多いが、ここは日本と同じように空の下に干す。雨が降っていても構わず干してあった。又、近くのカプリ島は青の洞窟で有名だが、船がやっと通れる小さな入口のため波が少しでもあると断念せざるを得ない。今回は残念ながら見られなかった。

珍しい町としてはマテーラ。キリストも見放したほどの土地である。貧しい人々は町外れの洞窟に住んでいた。今でも洞窟は残されていて住居として使われているものも多い。表向きは家、しかし室内は中を掘って造られているとのこと。この地区の教会も岩を掘ったものだ。訪れた日はあいにくの雨。目の前の光景がいつそう異様なものに映った。

旅をするといつも思う。“一生懸命生きよう”と。簡単そうで難しいこと。自分の生きてる環境を外から眺めてみたり、大地の恵みによって自分が生かされていることを改めて考えたりする。この旅もまさにそうだった。



海外交流記

「うれしいタイの友達」

大島 明博

6月下旬、仕事が少し暇になったのでタイの友人たちに会いたくなり出かけました。出発3週間前に10数通、日程と宿泊予定のホテル名を書いて手紙を出しました。全員と会うのはスケジュールが合わないと思い、返事が来た人とだけ会えれば良いと思っていました。タイの郵便事情が悪いのか、早い人で17日、遅くて25日かかり届いたようです。出発前日に3人が国際電話をくれました。3泊4日の旅でしたが、結局12人の友人がホテルに電話をくれ、忙しい中10人が会いにきてくれました。バンコク市内は午前9時頃から午後8時頃までは交通渋滞で思うように動けません。それに市内が暑さと排気ガスのせいか埃っぽくてたいへんでした。ここ数年で知り合った友人たちですが、雨期には例年洪水で通勤、通学がたいへんだと手紙に書いてあるところを見ると、洪水のせいで町が汚れているのかも知れません。東南アジアの青年達と付き合ってみるととても感心することがあります。私など老後のボケ防止にラジオ基礎英語講座を聞いている程度ですが、彼等は大学を出てそれなりに平均以上の収入を得ていながら、稼いだ金でニュージーランドに英語留学、その後また2年ほど働き日本語をマスターするために日本へ留学したいと頑張っています。平均月収は日本の10%以下だと思いますが、日本円で200万円ほどためてそれをさらに自分に投資するなんて、幸せすぎて呑気な日本人の我々には想像が付きません。のんびりとした旅をしたいと思いスケッチブックを持って出かけましたが、入れ替わり会いにきてくれた友人たちと過ごす時間が多くて、絵を描く暇がありませんでした。お互いの住んでいる町を訪問し合うことはより理解を深めることができると思いました。思いかけず忙しい旅となりましたが、実に楽しく充実した4日間でした。



ご協力ありがとうございました

- ① AHI (アジア保健研修財団) へ 69,908円
(内訳: 町民盆踊り大会の売り上げ金、63,965円と、昨年のプール分 5,943円の合計)
- ② 社会福祉法人「AJU自立の家」へ 5,000円

◆ 1996年度 行事足跡 ◆

1996年	3月26日～4月8日	ハンブルグ「独日市民交流」一行のホームステイ
	4月7日	定期総会と懇談会(上記一行の送別会も兼ねる)
	5月19日	ホームステイ反省会
	6月30日	龍照院で若松部屋相撲教室
	7月21日	タイ料理講習会(トムヤンクン、ラーカイ等) 講師: 田中ゆう子さん
	8月10・11日	町民盆踊り大会参加(ポップコーン販売等)
	10月6日	戸田川緑地でバーベキュー大会
	10月26日	“国際飢餓対策機構”海部推進協会主催 チャリティーフリーマーケットに参加
	11月17日	講演会「神父様から見た在住外国人」 講師: ジェームズ・ゴールマンさん
	12月22日	講演会「東ティモール紛争」 講師: 相馬 信夫さん クリスマスパーティー
1997年	2月16日	講演会「日本での喜怒哀楽体験」 講師: バイロン・ウォルトさん
	3月15日	和紙人形作り 講師: 工藤 満子さん

あとかき

原稿をお寄せいただいた皆さんありがとうございました。ただ、編集上の都合(主に予算面からのページ数制約)で載せられなかった原稿や写真がありましたことをお詫びします。

時間が許せば紙面のデザイン、その他に十分凝りたいものです。そのためには原稿を早く集めねば……。とにかくいろいろと反省点の多い今回の広報編集でした。(ふ)

「かにえ国際交流友の会」(KIFA)は、町民レベルでの国際交流をめざす蟹江町公認のボランティア団体で、蟹江町とその周辺の市町村に居住する会員で構成されています。年数回の各種行事等を企画し、外国人との交流を深めています。関心のある方ぜひご入会ください。お問い合わせは右の事務局までどうぞ。
(年会費は、個人会員 3,000円、賛助会員 10,000円です)

●現在の会員数
・個人 102人 ・企業 5社 ・賛助 17人

かにえ国際交流友の会

事務局 蟹江町役場 企画課
〒497 愛知県海部郡蟹江町大字西之森字長三郎2
TEL(05679)5-1111 FAX(05679)5-9188